

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 26 年 9 月 1 日	
所属部局・職	野生動物研究センター・博士課程学生
氏名	松島 慶

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
マレーシア サバ州
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
アルマジロの生態研究
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 26 年 7 月 29 日 ~ 平成 26 年 8 月 9 日 (12 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
サバ州立大学、アブドゥル・ハミド博士/セピロクオランウータンリハビリテーションセンター
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
[概要] 今回の渡航は、WRC博士課程の松川さんの「ボルネオ島の熱帯雨林に生息するヤマアラシ科動物の調査」に同行することで、調査のサポートを行いつつ、熱帯雨林における小型野生動物の調査の技法を、実践を通して学習することと、現地の研究者と意見交換することを目的とした。なお、同じくPWS履修生の沓間も行動を共にした。 熱帯林での調査は、主にテレメトリーによる個体追跡と、今回の渡航で試験的に導入した動的簡易コーン貫入試験機での巣穴の構造の調査を行い、器具の扱い方などを学ぶことができた。また、熱帯林中での活動日数は渡航期間の半分程度であったが、熱帯林での活動以外にも、許可の取得、現地関係者との交流などといった、調査を行う上で大切なことを知ることができた。
[内容] ・セピロク・熱帯林での調査 まず、松川さんが以前捕獲し、発信器付きの首輪を装着したヤマアラシ個体に対し、日中にテレメトリーでの調査を行った。日中ヤマアラシは巣穴に潜り眠っているため、利用している巣穴を特定することができる。テレメトリーは初心者であったので、ホームステイ先の家の庭で練習を行った。その結果、指向性がそこまで高くなく位置を特定するのは大変困難であること、接近すればするほど指向性は低下することがみられた。実際に森に入り、受信機の周波数を発信器の周波数に合わせると、2個体に対してシグナルを受信した。調査日数の都合もあり、1個体のシグナルの発信源を、テレメトリーを用いて特定しようとした結果、ほぼ1日の調査日を消費して未記載の巣穴を発見した。時間がかかった理由としては、地形が複雑であるため、電波が様々な方向に反射してしまい、発信源の方向がわかりづらいことが大きかった。こういった特性から、調査地を歩き回り、地形を理解することが大切であるといえる。 今回調査に利用した動的簡易コーン貫入試験機は、地盤調査試験機として知られるが、これを用いることで、目で確認することが難しい地中の巣穴の構造を確認することを目指した。結果として、大きな穴と穴の間において空間がありそうということが推定されたが、それを評価するには工夫が必要だと考えられる。調査を重ねていく上で生まれた疑問を解決するために必要なデータを得る上で新しい機材を導入することが今後あるに違いないが、何をどう利用し、得られたデータをどう扱うかといった、難しい問題がたくさんあると感じた。 松川さんの好意で1時間程度、夜間の森も歩くことができた。残念ながらアリなどしか見ることはできなかったが、森の中は真っ暗で、ライトだけを光源に進まなければならない、この中で調査を行うことの難しさを感じた。また、その日の昼間に雨が降っていたこともあり、森の中はぬかるんでいたり、滑りやすくなっていたりしたが、日によってコンディションが変わりやすいので、調査地の環境をよく理解していなければいけないと思った。
<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先： report@wildlife-science.org

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

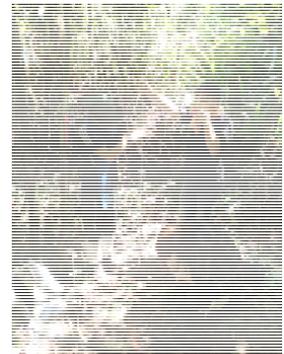
・アブドウル・ハミド博士との面談

サバ大にて、松川さんのカウンターパート側教官であるハミド博士との面談を行った。主な目的は同行者である沓間の、ワニの調査について何らかの情報が得られないかといったものであった。私自身は特に情報を得ることはできなかったが、英語で自身の研究内容・予定について伝えるという経験ができたのは大きな収穫であった。また、今回の面談に当たって、自らの今後の調査について整理することができたので、今後の調査に活かしていきたい。

・周辺施設への訪問

調査の合間を利用し、調査地近辺の動物園や保護センターの見学も行った。コタキナバルでは、ロッカウィ動物園と湿地センターへ行った。どちらも時間があまりなくゆっくり見ることはできなかった。動物園では多くの周辺に生息している生物たちが展示されていた。湿地センターでは、自然なマングローブ林中を歩くことができた。生き物たちとはあまり遭遇できなかったが、マレーシアを含む熱帯地域での環境多様性を知る上で大変参考になった。

セピロクには、調査対象林としても用いられている地域に、RDC (Rainforest Discovery Centre)、B S B C C (Bornean Sun Bear Conservation Centre)、S O R C (Sepilok Orangutan Rehabilitation Centre) といった施設が存在し、それぞれトレイルや観光客用展示が準備されている。これらの施設の見学も行ったが、どの施設でも熱帯林特有の植物相を身近に体感することができた。実際の調査中では、植物の種類などに深く注目しながら歩くことは難しいが、非常に多くの種類の樹木が入り乱れて林を形成していることが感じられた。



左：カメラトラップの設置 中：ラジオテレメトリー調査 右：貫入試験



左：ロッカウィ動物園のボルネオ象 中：湿地センター内のパネル 右：RDCの小路

6. その他 (特記事項など)

今回の渡航に当たって、WRC博士課程の松川さん、セピロクで宿泊させていただいたホストファミリーの方々、またPWSの幸島先生、松沢先生に大変お世話になりました。ありがとうございました。